

# インクルーシブ教育における日本とイタリアの比較

## ～インクルーシブ体育授業の提案～

尾張 叶歩（東京学芸大学）

### 1. 目的

本研究は、日本とイタリアのインクルーシブ教育を比較することで、日本の特別支援教育の課題を明確化すると共に、インクルーシブ教育の在り方を考察する。更には日本の体育科教育の課題である「体力・運動能力の二極化」への解決策をインクルーシブ教育の視点から提案することを目的とした。

### 2. 研究方法

日本のインクルーシブ教育、特別支援教育、体育科教育、インクルーシブ体育やイタリアのインクルーシブ教育に関する論文や書籍による文献調査を行った。

### 3. 結果と考察

1) 日本のインクルーシブ教育の現状を把握できた。日本のインクルーシブ教育がなぜ世界のスタンダードなインクルーシブ教育とは異なるのか、日本の障害児に対する教育の歴史をたどる中で、理解を深めることができた。

2) 世界のインクルーシブ教育に至るまでの動向と共にサマランカ声明に関する先行研究をあたることで、インクルーシブ教育の理念は、障害児に対してだけでなく、全ての子どもに対応したものであるということをはっきりと明らかにできた。

3) フルインクルージョンが達成されているイタリアでのインクルーシブ教育の制度に関する先行研究をあたり、ダンピングにならないための制度が整っていることが明らかになった。

4) インクルーシブ体育は、体力・運動能力の格差の拡大、言語に壁のある児童への対応といった諸問題の解決の糸口になる可能性があることを提案した。またその中で、インクルーシブ体育の新しい解釈として「性、年齢、人種、政治、宗教に加え、障害、体力差、体格差などを個性と捉え、自分とは違う個性を持つ人とスポーツを通して心が通うことや協力することによって、楽しさや充実感を感じ、成長していくことを目的としたもの」を提案した。

5) インクルーシブ体育の解釈の提案を踏まえて、2つの授業提案を行った。1つ目は複数の教員で行う体育授業の提案であり、これは多様な個々のニーズに対応するために、複数人の教員での授業を行うものである。2つ目は異学年交流の体育授業であり、これは生涯にわたってスポーツと親しむ態度を育成するために、単元計画と一緒に組み、最後のゲームや発表を全学年合同で行うというものである。

### 4. 結論

本研究では、日本とイタリアのインクルーシブ教育の分析によって、日本の特別支援教育の課題を明確化し、インクルーシブ体育の解釈と可能性、授業の提案を行うことができた。障害児に対する教育の歴史をたどる中で、どの時代の教育においても課題は変わっておらず「子どもにとっての最善の教育とはなにか」を問い続けていることが理解できた。どの教育制度や考えでも長所と短所の両面があり、完璧なものはない。そのため、教師が目の前の子どもをしっかりと見取り、子どもにとっての最善の教育は何かを追求し、教育者自身も変容していくことがより良い教育に繋がるという知見を得ることができた。

### <主な参考文献>

- 1) 荒川智, 障害のある子どもの教育改革提言, 全国障害問題研究会出版部, 2010
- 2) 平田勝政, 障害児教育学の現象・課題・未来, 培風館, 1996
- 3) 草野勝彦ら, インクルーシブ体育の創造「共に生きる」, 市村出版, 2007
- 4) 大内進ら, イタリアにおけるインクルーシブ教育に対応した教員養成及び通常の学校の教員の役割, 国立特別支援教育総合研究所紀要, 42:85-96, 2015
- 5) 榎原洋一, 日本のインクルーシブ教育は本物か?, 子ども学研究紀要, 5:1-6, 2017